

## 外国にルーツを持つ高校生への キャリアデザイン研修

公益財団法人滋賀県国際協会主査 大森 容子

### はじめに

2008年の経済危機以降、滋賀県内の在住外国人の総数は減少しましたが、高校へ進学する子どもたちは着実に増えています。日本語と母語（継承語）の両方を身につけたバイリンガルの子どもたちや、優秀な成績を取めさらに大学へと進学する子どもたちも出てきている一方、日本語力・学力とも課題を抱えているために、高校入学を果たしたにもかかわらず卒業することが非常に難しい子どもたちが存在しています。

もちろん彼らは受験して入学をしているのですが、実態としては、定員割れの高校や定時制高校に進学しているケースが多いという現実があります。ある高校の先生の話では、日常会話ができる生徒でも、授業や補習などで小学校低学年の漢字の練習から指導が必要だといいます。こうした実態の生徒たちが、高校の授業を理解し、無事に卒業を果たすことが、いかに困難か想像に難くありません。結果、ドロップアウトする生徒たちは後を絶たないのです。

いかにして、彼らが前向きに将来展望を描き、自分の進路を開拓していけるのかを考えたとき、就労に向けた支援の必要性を強く実感し、2012年度より新たな事業を立ち上げることにしました。

### 外国にルーツを持つ子どもたちに 必要な就労支援とは

実際に就職先を紹介できればそれに越したことはないのですが、当協会ではそのような業務を行う資格はありません。そこで、「教育」という切り口から事業を組み立てることにしました。

事業を始めるに当たり、子どもたちの実態を反映

するため、外国人の高校生が集中する高校の教員や外国人児童生徒学習支援団体代表者、また進路指導に携わる教育関係者や一般企業の方、さらにキャリア教育の専門家、県多文化共生担当課の職員に運営委員として協力いただくことにしました。

運営委員会では、まず外国にルーツを持つ子どもたちが抱える課題は何かを考えることから始めました。その中で、彼らが身近なロールモデルと出会う機会が極めて少なく、工場のラインなどで「非正規労働者として」単純労働に従事する保護者たちの不安定な状態と、自分自身の将来を重ね合わせる傾向があり、なかなか前向きな将来展望が描けていないという状況が見えてきました。

そこで計画したのが、「職場見学」と「先輩と語る会」です。実際の仕事の現場を見る体験と自分たちと同じ境遇を乗り越えた先輩たちから学ぶ機会を作ることにしました。見学先は滋賀を代表する製菓会社で、事業所の中には製造工場をはじめ、企画デザイン、セールス、総務、経理といったセクションのみならず、企業内保育園や店舗を飾る山野草を育成する園芸部など、さまざまな部



職場見学  
どんな仕事をしている人たちがいたか、ワークシートに記入しながら見学



先輩と語る会  
先輩ゲストとリラックスした雰囲気の中、自由に話を交わしました

署を配置しているところだったので、高校生たちは一つの企業でも、多種多様な仕事や人があってこそ成り立つことを知ることができました。また、先輩と語る会の開催に当たっては、大学生や社会人として活躍している先輩を招き、運営委員の所属校に協力をいただいて、校内の会議室で放課後を利用して実施することができました。

## 聞こえてきた“声”と 想定外の反応・効果

職場見学に参加していた高校生が友だちと雑談していた会話の中に、「自分は親から“日本語も十分できないのに、ちゃんとした仕事に就けるわけがない”といわれている」といった声があったそうです。その一方で、経済的な事情から専門学校への進学をあきらめ、高校卒業後の進路に前向きになれなくなっていた生徒は、先輩の話聞き「今日いろんな話を聞いて、みんないろんなことがあったんだなあって思いました。私もこれからのことを見つめて、自分がやりたいことを見つけて、がんばって、がまん強くやりたいと思います」という感想を残してくれました。

また事業実施後、想定外の反応がありました。職場見学を受け入れてくださった企業の方から、「改めて身近にこれほど多くの外国の子どもたちが存在することに気付いた」という声や、日本で生まれ育ったにもかかわらず容姿の違いから嫌な思いをしてきたという生徒の話や耳にしたことで、「外国にルーツを持つ子どもたちに対する認識をこちらが改めなくてはならない」と考えられたこと、そして学校現場からは、「今回の研修に参加し、他校の生徒との交流などから望ましい勤労観や将来のビジョンを開拓した生徒もいる」という報告も届き、当初考えていた以上の波及効果を得ることができ、大変うれしく思いました。



職場見学ふりかえり  
初めて出会った他校の生徒たちとも意気投合。新しい友だちもできた

## 人と人とのつながりを大切にした 就労支援へ

前年度の事業をふりかえり、2013年度はさらに多くのすばらしい人たちとの出会いの場を設けたいと考え、パティシエや助産師、溶接技師といったさまざまな分野で活躍されている職業人ゲストから生徒たちが直接話を聞かせてもらう機会を夏休み期間中に設けました。

県内の公立高校とブラジル人学校にも声掛けし、当日は7つの学校から5か国にルーツを持つ高校生40人が参加しまし



職業人と語る会  
16職種の職業人ゲスト（うち7人は外国にルーツを持つ方）から熱心に話を聞く姿ばかり

がらも、職業人ゲストから熱心に話を聞く姿があふれていました。高校生からは、「夢をあきらめず、一生懸命日本語を勉強すれば、うまくいくんだと感じました」、「私は将来のことがとても心配でしたが、おかげで安心しました。見たことも聞いたこともない仕事の数々に出会いました」、「隣人のことを気に掛けたり、自分の時間をアドバイスや疑問点の解決のために使ってくれる人々がいることをうれしく思いました。そのことが、大学に行きたいと思ったり、努力しようと思う気持ちを大きくしてくれます」といった前向きな感想が聞かれ、ゲストからは「企業側にも、日本で生まれ育っている子どもも努力し、とても良い人材がたくさんいることについて理解が進むと良いですね」といったコメントが寄せられました。

当協会では、今後も次世代の若者たちが自らの責任と意志により望む進路が描けるよう、彼ら自身のエンパワメントと同時に、人と人とのつながりを大切にしながら、地域の人々の理解を促していくことで、望ましい多文化共生の社会づくりに努めていきたいと考えています。